

札幌会場

アイヌの精神文化

9月10日（水）19：00～20：30

講師

静内アイヌ語教室講師 葛野 次雄



皆さんお晩でございます。私は静内のアイヌ語教室で講師をしています葛野です。

“アイヌ”という言葉は差別的な言葉としても使われていた言葉ですが、私の父は「アイヌと言う言葉は、本来はアイヌと言うんだ」と言っていました。「ア」は先輩に対する尊敬の言葉、「エ」は後輩に対する尊敬の言葉、「イ」はそのことを皆さんに聞かせるということで、「ヌ」はそれを皆さんが聞いてくれるということです。つまり、先輩後輩が互いに意見のやり取りをすることです。

父はアイヌに関して、昔聞いたことを本にまとめることなどをしていましたが、私は20歳過ぎまで、アイヌということで差別されたと感じないで生きていました。その父は結核を患って、14年ぐらい苫小牧や三石などの病院に入退院を繰り返していました。皆さんもご存知だと思いますが、当時は結核になるとものすごく差別されていました。私の家は静内町の東別という所ですが、そこにも結核を患った人がいました。私は自分の父親が結核であるにも関わらず、結核を患った人の家のそばを通る時、友達が「この家は結核だから、息すると伝染するからお前ら息するなよ」と言うのに対し「あ、そうか、そうか」と言って走って通り過ぎるというようなことをしていました。私はアイヌで、結核患者の父がいたにも関わらず差別を受けたと感じることはありませんでした。

私は20歳を過ぎた頃にタクシーの乗務員になりました。ある時、観光客と思われる女の子2人を乗せました。皆さんはハイセイコーをご存知だと思いますが、そのハイセイコーを見に新冠まで行きたいと言われました。そのころ片道2500円ぐらいの所だったので、往復で5000円、これはいいなと思いながら車を走らせていました。新冠へ向いながら「お姉ちゃんたち、どこから来たの」と聞いたら、東京とか千葉とか言っていました。そんな会話の中で「運転手

さん、せっかく北海道に来たから、アイヌの人を見たい」と言われました。これは昭和51年か52年頃の話です。そのとき、私には自分がアイヌであるという意識はありましたが、東京の人はなんだか訳の分からないこと言うなと思いつつ「ちょっと待っててよ、今アイヌの人を見せてやるから、そのカーブ過ぎたらいるから見せてやるからね」と言うと、その人たちは期待して待っています。そして、カーブを曲がったところで「俺がアイヌなんだ」と言ってやったんです。そのときの私は、髭もなく、細くて結構男前だったので、びっくりしていました。その人たちがなぜびっくりしたかということ、アイヌというのは熊や鹿と共に暮らしているというイメージを持っていたからです。誰が書いたのか、そういうことを文化として教えられていたからです。22～23歳ぐらいと思われる人たちから「北海道に来たからアイヌに会いたい」と聞かされて、日本では教育の中でアイヌのことをどのように教えているのだろうかと思うと、がっかりしました。

私は岡山と金沢と東京に行ったことがありますが、いまだにアイヌのことが知られていないと思うことが多いです。また、私たちも知らないことが多いと思います。岡山へ行った時に、ハンセン病患者の施設を訪ねて、そこにいる人たちがどれだけ束縛され、大変な人生を送ってきたかを知りました。その人たちはものすごく辛い思いをしていて、私たちのように子孫を残すことも許されずに生きてきました。この現状はアイヌも考えなきゃならないと思います。

日本の人口が1億6200万人、北海道でアイヌと称される人たちは、数年前の実態調査で約4万人と言われていています。4万人のアイヌが1億6200万人の和人にに対し、北海道はアイヌの土地である、北方領土もアイヌの土地であると言っていますが、格好のいいことばかり言って、アイヌとしてこういう生活圏の中で何をしてきたのかという

ことを日本国民に教えていないのが現実だと思います。国もアイヌがどういう生活、文化を送ってきたのかということをもう少し前面に出して見せるべきです。どこかの新聞の片隅に、自分たちはこういうことをした、国はこういうことをしたという記事が載るだけでは、私は納得できません。

こういった場所で話をさせてもらえる事は、本当にうれしい反面、もっともっと勉強しなければならないと感じています。私は他の人より毛が濃くて色が黒いからアイヌと思われそうですが、血としては、それほど濃い方ではありません。たまたまアイヌの家に生まれ育ったということです。

皆さん土葬を知っていますか。土葬は日本の文化として保護されています。宗教の自由として土葬、火葬、空葬、川葬、海葬などが認められていると思います。火葬が一般的になったのは昭和に入ってからだと思います。覚えている中で土葬は、静内で20数年前に1〜2軒あっただけです。墓もクワ（墓標）を立てただけだったのが、やがて石の墓になりました。父はそうした墓に入るのも嫌だったようです。亡くなる何年も前からそんな話をしていた、父が亡くなったなら土葬がいいのか、それとも火葬がいいのかを聞いてみました。そうすると火葬にしたら熱いから、できれば土葬がいいと言っていました。

父が亡くなったとき、葬儀は仏式と、俗に言うアイヌブリの二通りで行いました。私は葛野家を背負って立つ者として、アイヌ文化を後世に伝えなければならないという思いもありました。土葬するか火葬するかということで、兄弟でもめました。父の思いもあるのだからと、私は父の言ったとおりに葬儀を行うことにしました。アイヌブリの葬儀は、父と40年来の親交のあった北海学園の藤村久和さんをお願いしてとりおこないました。

これがとても大変で、死装束や足袋、手にはめる手甲などを作するため、持ち寄りの絹と糸で縫って二昼夜ぐらいかかりました。みんな一針一針、交代で縫いあげます。それからカソマンテといって、家造って、それを送るということもしました。母が亡くなったときにもアイヌブリで多少行いましたが、父が亡くなったときほどではありませんでした。そのときには小さい茅葺きの家造って、その中に生活用品を全部入れて天界に持たせました。天界というのはシンリッカムイです。どういうわけかアイヌの人たちは、小さな小屋を作って、茶碗、箸、布団などの生活用品をシンリッカムイと一緒に送ります。父から聞いた話では、そのとき家の中にあるものを全て壊して送るそうです。この送るというのは、家の中に生活用品を入れて火をつけて煙にして天界に届けるということです。すると天界で元通りになるということです。父が亡くなったときには、シンリッカムイには母がいて、小さい家もあるのだから、送らなくてもいいのではないかと思いましたが、母は何年も前に死んでいて家が古くなっている、だから、もう一度、新しい家を造って送るべきということになってカソマンテを行いました。

すると、消防署から「むやみやたらに火を付けるな」と

注意されました。平成9年にできたアイヌ新法で、アイヌの生活の伝承やアイヌの風習でやるということを復元、再生しなさいということが認められているのだから、土葬もカソマンテで火を付けることも駄目だと言うのなら、アイヌの伝統文化をどこで再生すれば良いのかわかりません。これでは言っていることと、やっていることが違うという気がしました。土葬の許可は、宗教の自由ということでまったく問題なく役場で認められました。この土葬の話で、私からの話を終わらせたいと思います。何か質問はありますか。

私のアチャ（父の呼び名）は、自分がオンネしたら、3年、5年の間はイチャルパをしなくても良い、とも言っていました。この事について聞きたい事があればお話しします。

見たところアイヌの人がいないから、私たちアイヌがどのように生きて行けばいいのかということ、皆さんへ逆に質問したいと思います。

シリコロカムイというのは分かりますか。

質問 地下のことですね。

葛野 そうです。シリコロカムイというのは地下ですね。シオイナシオルは大自然界という言葉。私たちが住んでいるところがシオイナシオルで、中間の部分です。下がシリコロカムイで、天界がシンリッカムイです。

質問 地下の地下で良いんですか。

葛野 そうですね。アイヌにはどこが一番とかという考えはないはずです。ちょっと話が変わりますが、カムイノミがありますよね。お酒をあげて、神にお願いする。これは火の神様を通してお願いします。その火の神をイレフチと言います。

質問 カムイフチではないですか。

葛野 カムイフチとも言います。地域によっていろいろな言い方をします。

質問 カムイフチでも良いんですね。

葛野 カムイフチでも良いです。カムイノミも地域で違いがあり、あくまでも静内の葛野家ではこういうカムイノミをしていますよということで了解してください。アイヌの人がみんな同じものの考え方で、同じことをやっているというわけではありません。葛野家ではということだと理解してください。

質問 その家、その家によって違うということですか。

葛野 そうです。安易に違うとも言えませんが同じとも言えません。川をひとつ越えただけで、全然違うという場合もあります。ものの考え方、やり方が違う。

質問 火の神様は男の人だと思っていたんですが、どうして女の人なんですか。

葛野 それが大事なところですが、なぜイレスフチが女なのかは分かりません。私の家にヌサがあって、神様が12本あるんですけど、その中のイレスフチも女の神様、ワッカウスカムイ（水の神様）も女の神で、山の神も女の神様です。

ヌサでは、女の神様には男のイナウを、男の神様には女のイナウをあげます。女の神様に女のイナウをあげると怒ります。女の人の子孫を繁栄してくれるということで、イレスフチが母とされていて、カムイノミのときには一番先に、今日は何々のわけで何々の神様にお祈りをしますと火の神様にお祈りをします。それが終わるとイチャルパ（先祖供養）に入ります。

質問 女の神様に男の人が拝むということですか。

葛野 我々が神聖な祈りをイレスフチに届けようとしている時に女の人が近づいてくると、女の神様のイレスフチはあまり良い気がなくて嫉妬します。だから、カムイノミが始まったら女の方は火の周りに行ったら駄目だとされていますし、女の方が火の神様にカムイノミしても駄目だとされています。ただし、その家にお父さんがいないような場合には、女の方がイレスフチに向かってカムイノミしてもいいとされています。男の人がいるのにあえて女の方がカムイノミするのが駄目ということです。

ただ女の神様に男の人が祝詞をあげるということは、よくよく考えてみると、女の人に男の人がひざまずいて御神酒をあげるのだから、上下の問題ではありませんが、位的には女の方が上になりますよね。

質問 儀式の場合は普段着とは着るものが違うのですか。儀式用の着物の模様は男と女では違うのでしょうか。

葛野 現在、見ることで着物は、儀式用のものがほとんどで、普段着としての着物は見ることはないと思います。着物の模様はアイヌの精神を表していますが、これはあくまでも儀式のときに着るものです。

道庁に抗議に行く時や、東京の街中でデモ行進する時に、アイヌだからといってアイヌの格好をする必要があるだろうかと感じます。私も着物を着て抗議に加わったことがあります。この着物はあくまでも儀式のときに着るものだと考えています。

このことについて、皆さんはどう考えますか。逆に皆さんの考えを聞いて帰りたいとも思います。皆さんどうですか、着物を着て道に立っていたり、空港で物を売っていたり、そこまでアイヌがアイヌらしくやらないといけなんでしょうか。

質問 神聖なものですから、普段着とは違う扱いを受けても良いと思います。営業用に着てはいけないよう

に思います。

葛野 そうですね。営業じゃないんだから。

質問 儀式は全く違うものですよ。前から違和感がありました。その着物ができあがった年代、または女性用なのか男性用なのか、または儀式の種類によって着物の模様も違っていただけないかなと感じていたんです。よく分からないんですが。ですから、その模様もおそらく大変な意味合いをもっていたのではないのかなと思います。

質問 昔の絵を見ると着物を着ていたと思うんです。たぶん日常着だったと思うんです。すると、どう着ても良いんじゃないかと思います。確かに営業用にするのは抵抗もあるし、そこまでしなくてもということもあるんですけど、一方、分かってもらう人を増やすためには効果があると思います。どちらが良いとか悪いとか一概に言えないと考えていました。千歳空港で年1〜2回やっていますが、それに対する意見を聞きますけど、それはそれで効果的だと思います。

葛野 そういう見方、考え方もあると思います。ただ、アイヌのことを多少でも知っていればいいけれど、例えば関西からの修学旅行生が、着物を着ているアイヌの姿を千歳空港で見ると、そのまま頭に焼き付けて「アイヌの人はいつもああいう服装なんだ」という印象になってしまいます。家でもああいう格好で鹿や熊と戯れていると思われることもあると思います。

質問 今はそう思う人は少なくなっていると思います。

葛野 例えば白老のアイヌ民族博物館や旭川、釧路などで、着物を着て踊りを見せていますが、理解している人もいるでしょうが、100パーセント全員が理解するのは難しいことです。

質問 例えば日本人が和服を着て外国に行くと、日本人は振り袖を着て、髪も結ってと誤解されます。だだ、それをはずしてしまうと伝統文化とは何だということになります。アイヌ民族だけではなくて、世界中のそれぞれの民族に伝統文化がありますが、日常的に独自の服装、格好をしている人は少ないです。その辺を理解させるのが教育だと思います。日本では民族教育、伝統文化教育が欠けていると思います。アイヌ新法で目指すものはそこだと思います。同時にアイヌ民族の地位、権利という根本が新法には欠けています。

質問 話が戻ってしまいますが、先ほど火の神様が女性だとおっしゃいまして、その理由が子孫繁栄にあるとおっしゃったような気がするのですが、私は子孫繁栄がなぜ火の神様に結びつくのか分かりません。

なぜ火の神様が女性だとお考えですか。

葛野 私たち、アイヌ民族は、太陽の神様、空気の神様、大地の神様、大自然界の神々に対して、カムイノミをします。人間は、そうした神々の恵みにより生かされているからこそ、「カムイ、トノト、カムイアシコロ、カムイイモカ」と祈言葉をカムイシプヤに乗せて、天界に送り届けます。この祈言葉が届いた証しが、カムイノミの時にヌサに立てたシトゥイナウが次の日の朝まで立っていることです。なおかつ、カムイノミをした時に立てたハシナウから芽が出て、それがやがて太くなり、イナウ、ハシナウが取れるようになると、間違いなく神様に祈言葉が届いたということになります。そのイナウ、ハシナウをカムイノミに使うという循環の形が、アイヌの精神です。つまり、アイヌの世界では、大自然界の物々に対して、天界からいただいたことに礼拝する。もちろん先祖に対しても、自分1人で生まれたわけではなく、父母、じいちゃん、ばあちゃんがいてはじめて今の自分がいるのだから、大自然界の神々とともに先祖に対しても礼拝します。自然界の営みとアイヌの営みが交わるところがあるからこそ、カムイノミは大自然界に対して、イチャルパは先祖に対して礼拝恩恵の言葉で祈ります。この心が子孫繁栄にもつながっていきます。

例えば、火を燃やすには木がなければならぬ、木は山がなければ生えません。ということは、火も木もシリコロカムイがなければなりません。大地の神様に何らかの形で種が落ち、そこから芽が出て葉っぱが出て大木になります。1本の木が成長するには何十年、何百年とかかります。そして、シリコロカムイの中の水や微生物などの栄養がなければ成長しません。さらに、リコマカムイ（太陽の神様）がいなければ、自然界の植物は成長しません。雨も降らなくてはなりません。地球はそうして成り立っています。ですから、火の神様が母で一番大事な神様だと言っても、それだけでは地球上で生きていけません。火の神様、太陽の神様、空気の神様、土の神様、雨の神様がいて、芽を出して実をつけて子孫繁栄に繋がります。

アチャ（父）とカムイノミをした時には「イレスフチ、イレスカムイ、タント…」と始まりました。まずフチという言葉が出て来ます。聖なる母大地の神、太陽の神、水の神、天の神、家の神、ヌサの神が女性の神の代表格です。

父がなぜ土葬にしろと言ったのか。父は、キナで編んだゴザに包まれています。これが10年以上経つとどうなりますか。ゴザは最終的には腐っていきます。そしていずれ父の亡骸は土の中の微生物の生きる糧になります。それが草木の栄養になるわけです。地球の恩恵になります。こうしてシリコロカムイに帰ることが天界のシンリッカムイの魂を受け継ぐことになるんです。

質問 私は樺太に長く住んでいたのですが、そこにはア

イヌ部落がありました。これは差別ですよ。和人の住む町のはずれにアイヌ部落があって、そこにアイヌ人をまとめて住まわせていた。今、北海道にはアイヌ部落はないと思うのですが。

葛野 部落というのは差別用語になったわけでしょう。本州の同和問題で部落という言葉は差別という認識が出てきた。ただ私はアイヌという少数民族であって、アイヌ部落に住んでいて何が悪いんだという気持ちもあります。だから、和人の言葉でアイヌや同和を消そうとして、都合の良い話ばかりをしているようにも思います。

質問 先生もご存じのようですが、本州では部落民というのがありますよね。それについて調べられたことがありますか。

葛野 実態調査したかどうか分らないけど、現在約500万人といわれていると聞きました。本当はもっと多いようです。

質問 本州では、日本人同士の中での部落民差別ですよね。

葛野 そうです。もともと日本人というのはいなかったはず。難しいことを言うと訳が分からなくなりますが、日本人というのはいなかった。しかし、江戸幕府が士農工商という階級制度を作って、人を差別した。差別で落としてしまえば、もうあがってこないだろうという考え方です。

質問 アイヌの神様、宗教は一種類ですか。

葛野 宗教観というか、自然界の全てが神様です。神様に対して特に誰が一番と言う事はありません。自分がこの世にいるのは先祖がいるからであり、自分が知っているエカシ（村おさ）の名前を言ってからカムイノミをすると思います。私の家のヌサには12の神様がいてと言いましたが、14のところもあれば、神様がないところもあります。それぞれの地域や家によって異なりますが、あらゆるものに神が宿っているという考え方はあると思います。

それでは時間ということなので、これからもアイヌの文化に触れて、勉強していただきたいと思います。長時間にわたり、どうもありがとうございました。

パセノボ、イヤイライケレ...

イヤイライケレ...